



遣伯使見聞録



Por um future melhor

(どの子の未来も明るくなりますように！：昨年のブラジル通信の題名)
日本ラグビー強いですね。大きな体の相手に力で負けていない。ぶつかってもぶつかっても前に進んでいく心と体の強さは、外国にいて
勇気づけられますし、日本人として誇らしいです。

クリチバやマリングで聞いた話をまとめてトピック的に紹介(その
2)します。



【トピック話】その2

③特別支援教育の話

- ・ブラジルでは、基本的に全員普通学校に通うのが子どもの人権と考える。しかし、脳神経科等の診断書と親の要望があれば、特別支援学校に入ることができる。
 - ・知的情緒的に障害をもった方は国内で200万人いて、増加している。通常学校の中にも特別支援の疑いがあったり、支援が必要だったりする子は多い。
 - ・重度の障害や重複障害の子、40歳以上の方もいて、社会に出ていくことは難しい状況にある。
 - ・親は自分の子の状況を受け入れられず、普通学校に行ってからやっと気づく。1歳半健診や3歳児健診はなく、低学年の子で発達遅れがあると思われる場合、先生が医者に行くよう親に勧める。
 - ・SUS (ブラジルの保健機関) から、常時介護士やカウンセラーが派遣されて、対応している。言語、精神、心理について相談にのる。
 - ・一見危なそうなゴルフを取り入れている学校があった。自分でやりきる、集中力が必要、勝敗がある、応援が大切、順番を待つという抑制や我慢などから、ゴルフは障害のある子にはよいらしい。
 - ・州や市からの資金援助は少なく、イベントやコンクールで集めたお金で修理や運営の足しにしている。
 - ・障害のある子には、近すぎず離れすぎずがよい。火と同じで、近すぎるとやけどをし、離れすぎでは温かくない。子どもの指導はもちろん、教員研修や保護者に理解を得るのが難しい(ある特別支援学校の校長先生より)。
- ★ブラジルの特別支援教育も難しく、厳しいものを感じました。ただ出会う子はどの子も明るくて、愛想がよかったです。「どの子の未来も明るくなりますように！」と願うばかりです。



しゃべりたい ~ナッツコラム~

こちらでの会話は通訳さんとポケットークを頼るしかないね。ナッツはホテルのフロントでポケットークを使って「これを電子レンジで1分30秒温めてください！」と言ってみた。フロントの方は「オッケー！」と言ってレトルトカレーを温めてくれた。ポケットークはすごいね！

でも、教育の話となるとそうはいかないから、現場では通訳さんをお願いしているね。ところがナッツはだんだん気づいてきたブラジル人はとにかくよくしゃべるということ…。ナッツが質問を一つするとだいたい3分は返事が返ってこない。答えを言う前にその理由や経緯まで話し始め、となりにいた人も話し始め、聞いたことじゃない答えが返ってくることも…。イライラしていたでしょ。それはその方だけでなく、出会うブラジル人はだいたいよくしゃべる。親切心で、知っていることはすべて話してくれるんだね。また、ポルトガル語は日本語よりも流れるように発音されるから、どンドン口から言葉があふれてくるのだろうね。

そこでナッツは思った。日本に来るブラジル人の子どもたちもきっといっぱいしゃべりたいのだろうな。でも、何を言っているのかわからない、何を言っても通じないという環境の中で、イライラするよね…市内のある外国人児童のことを思い出したナッツでした。(ナッツの腕時計より)

